

江戸時代における宮中儀式絵の制作と絵師に関する基礎研究

大阪芸術大学 美術学科 教授 河田 昌之

大嘗会(大嘗祭)は、七世紀後半の天武もしくは持統朝に始められたと想定されており、後土御門天皇の代の文正元年(一四六六)十二月に中断された。後柏原天皇(一四六四～一五二六)から霊元天皇(一六五四～一七三二)の九代にわたる二二〇年ほどは行われず、十五世紀後半の応仁の乱以後は、朝儀も衰微した。江戸時代に入り、東山天皇の代の貞享四年(一六八七)に略儀による大嘗祭は行われたが、本格的な復興は桜町天皇の元文元年(一七三六)からである。本研究で主として取り扱う作品は、「大嘗会図巻」(茨城県立歴史館蔵)で、大嘗会を題材にした5巻の絵巻である。内容は大嘗会の次第が図示され、儀式の進行や儀式のしつらえほか、大嘗会全体に関わる公家をはじめとした主担者や儀式を構成する人々の役割もつづさに記録され、以降の儀式の先例として重要な意義をもつ歴史資料でもある。本作は一橋徳川家の旧蔵品で一九八六年に茨城県立歴史館に寄贈された謂れも知られており、幕府に連なる家柄の伝来品である点でも高い資料性を持つ。

本作は「大嘗會ニ付出勤之堂上地下」の内題をもつ儀式参加者名を書いたものと、内題はないが「大嘗會卯日次第 無行幸儀」から「豊明節会次第」まで四日間の式次第を墨書した二冊の冊子(十五.五×二十二.五 cm)が付属しており、特定の人物がこの儀式で果たした役割を顕彰する性格も備わっている。

この作品は事前の調査によって、三十四場面からなり、錯簡があるものの、儀式は本格的な行事日の卯日は省かれているが、辰日の悠紀千日の会は二十三場面、主基の節会が四場面、巳日の悠紀節会が二場面、主基節会が四場面、午日に催される豊明の節会が一場面として構成される。そのなかでも「辰日悠紀節会儀式」はこの絵巻中の大部分を占めており、特別の性格を有する儀式とわかる。発色の良い顔料や人物の個性を的確に描き分ける画技に通じた絵師の存在が推定されるが、未だこの

絵師を明らかにするに足り得る研究がなされていない。この度の研究は絵巻に表された儀式の手順を確認しながら、あらためて儀式の順序を見直すところから始めた。

將軍徳川吉宗の指示により、桜町天皇の大嘗会の様子を荷田春満が記録した『大嘗会儀式具積』『大嘗会便蒙』は、住吉広守(一七〇五～一七七七)によって八巻の絵巻にまとめられたことが述べてある。一橋家からの寄贈になる『御道具帳』(東博蔵)には大嘗会の軸5巻を描いた絵師として「住吉内記」の名が上がるのが先行研究で明らかにされた(武子裕美「研究ノート 一橋徳川家の道具管理」『茨城県立歴史館報』47)。申請者は、和泉市久保惣記念美術館で開催した特別展「土佐派と住吉派 其の二一やまと絵の展開と流派の個性一」(2021年)の展覧会図録に、作品解説として「住吉内記」に該当する絵師をその活躍期から住吉広守、広行、広尚の三人を推定した。そのなかで、本絵巻に描かれた人物の耳の表現に注目して、「本作の人物の耳の形状を取り上げると、輪郭とその内側に一本の描線を入れて作り上げるものが多い。三人のなかでは広守、広行の作品にそれが顕著である。さらに他の部分を比較すれば本作品の絵師推定の手がかりに結びつくと思われる」と書いた。これを今回の調査での注目点の一つとし、関連作品を調査したがいまだ特定には時間がかかることがわかり、今後も調査を継続し明らかにしたいと考えている。

今回の研究では、他の儀式絵との比較も十分に行えず、比較検討する上での課題を見つける結果になかったが、新たな研究の視点が得られたことから、今後の儀式絵研究の足がかりになった点は本研究のメリットである。

本絵巻の錯簡を付属する式次第書に基づいて、提示した構成案を再度見直し、本作の絵師の探究と歴史資料としての意義を明確にすることを通して、今後も土佐派や住吉派の儀式絵における役割の考究できるように基礎的研究を進めていきたい。